

住環境に関する母親の評価が子育てに対する意識および 養育態度に及ぼす影響

松 本 聡 子

(早稲田大学大学院人間科学研究科)

原稿受付平成 13 年 10 月 25 日；原稿受理平成 14 年 5 月 2 日

The Effect of Mother's Evaluation of Dwelling Environment on Her Perception and Attitude toward Childrearing

Satoko MATSUMOTO

Graduate School of Human Sciences, Waseda University, Tokorozawa, Saitama 359-1192

This study was conducted to investigate the relationship among dwelling environment evaluation, mothers' feelings toward childrearing (in this study, mothers' feeling that childrearing is restricting their other activities), and childrearing attitude. The questionnaire regarding dwelling environment and childrearing were distributed in Tokyo and Chiba district to mothers with young children. The completed answers from 841 mothers were used for the analysis. Through factor analysis, four factors were extracted from items representing dwelling environment evaluation, namely "space within the house," "room environment," "structure of the house" and "neighborhood environment." By using multiple regression analysis, the paths were drawn from factors such as "space within the house" and "structure of the house," which are considered the factors to induce feeling of one's activities being restricted due to childrearing and eventually to affect the caring attitude toward childrearing. This result indicates that acquiring satisfying environment for mothers eases the mothers' negative feeling toward childrearing and eventually develops caring relationship with their children.

(Received October 25, 2001; Accepted in revised form May 2, 2002)

Keywords: childrearing 育児, dwelling environment 住環境, stress ストレス, childrearing attitude 養育態度, questionnaire アンケート.

1. はじめに

近年、子育て環境の問題が、少子化問題などの面から注目されるようになってきている。一言で「環境」と言っても、自然文化環境、人間関係を含む社会的環境、そして家庭・近隣の住環境があり、これらが相互に子育てに影響を及ぼしているものと考えられる。

現在までは多くの場合「子育て環境」と言えば、主にソーシャルサポートなど社会的な環境を中心にして議論されてきた感がある。しかしながら、住環境の質そのものについて検討することも今後重要になってくると考えられる。平成 10 年度の厚生白書の統計によると、妻が理想の子ども数を持たない理由として「家が狭いから」と回答した割合は 13.4%にものぼっている(厚生省 1998)。また、東京都の調査でも約 9 割が東京の少子化に対して厳しい住宅事情が影響してい

ると回答している(東京都住宅局総務部住宅政策室 1998 a)。これらの結果は、秋山(1998)や袖井(1994)が指摘しているように、住環境の悪条件が子どもの発達や子育てをする母親に負の影響を及ぼすことを、多くの人々が経験的に予測していることを示していると解釈できる。

このような子どもの発達と住環境の関係を早川と岡本(1993)は、住環境が直接子どもに与える影響と、住環境の影響がまず家族に及び、それが子どもに作用するという 2 種類に分類している。後者について早川(1994)は、家庭内の雰囲気、特に母親の感情が子どもに影響を及ぼすことが多く、「その母親の感情が住居の状態によっても左右されがちなこと」に注意しなければならぬと述べ、その重要性を指摘している。Parke(1978)、定行(1986)も住環境の物理的な条

件が、子どもに直接的な影響を及ぼすだけではなく、母親の意識・行動を通して、間接的に影響を与えているのではないかと述べている。

では実際に、住環境の状態は母親に対して影響を及ぼしているのでしょうか。逢坂(1991)は、東京都内在住の母親に対して、生活環境と健康状態に関する調査を実施し、母親の神経症的傾向の割合と住環境(住宅構造・居住階)の関連性を検討した。その結果、木造住宅よりも鉄筋・鉄骨住宅に居住している母親の方が神経症的傾向が強く、また、この傾向は居住階の上昇に伴って強くなることを報告している。また渡辺(1982)は住環境から蒙るストレスの程度を示す「住環境ストレス」と専業主婦の健康との関連について、主婦344人を対象とした調査の結果から、「住環境ストレス度」が大きいほど心身不健康度が高いということを明らかにした。この結果について渡辺(1985a)は、住居の物理的条件は居住者に生理的・心理的・行動的な影響を及ぼしており、個人にとって好ましくない側面は、住環境ストレスとして、居住者の精神的健康にも何らかのかかわりあいをもっていると考察している。さらに、河野等(1996)は、高層集合住宅に居住する母親181人を対象とし、母親の生活環境への満足度と自覚的健康度の関連性について調査を行った。その結果、生活環境に対する満足度が低い母親は精神的な不調が多いという傾向が見られたことから、生活環境への満足度は自覚的健康度(特に精神的健康度)と関係があることを指摘している。これらの研究結果から、住環境が母親の感情や精神面に影響を及ぼしていることが推察される。

次に、住環境によって影響を受けた母親の状態と子どもの発達との関係について指摘している研究として、Oda *et al.* (1989)が行った、集合住宅に住む子どもの自立行動の発達についての調査が挙げられる。Oda *et al.* (1989)は、高層階居住が子どもの発達に及ぼす影響として、基本的生活習慣の自立の遅れを指摘し、その原因として、高層階になるほど母子密着が強くなりやすく、その結果、子どもの自立行動の発達が遅れるのではないかと述べている。さらに「高層階に住む子どもの自立の遅れの根本的原因は養育者である母親の態度であり、それを高層という住環境が助長しているということが言える」(織田と日暮 1991)と考察している。また渡辺(1985b)は、集合住宅での子育てとストレスについて検討しており、隣近所への気兼ねや子どもの事故に対する不安感など、住環境は母親の

潜在的・顕在的なストレスとなっており、このようなストレスは子育て期に相当する20代の主婦に高いということを指摘している。

では、住環境から受けるストレスは子育てに対する意識や養育態度との間にどのような関係があると考えられるだろうか。子育て中の母親は、子育てをすることに喜びや楽しさを感じると同時に、育児に対する不安や育児ノイローゼ、子どもを育てていく上での悩み事や煩わしさから派生する様々な感情を持つと考えられる。後者のような感情を包括的に述べたものが子育てに対するストレスであるとされている(戸田 2000)。このような子育てに対するストレスに影響を及ぼしている要因は、先行研究から数多く明らかにされてきており、父親のサポートや母親自身の社会的な人間関係(牧野 1982, 1988)、母親の就業や生育家族への良好なイメージ(坂間等 1999)などが報告されている。

子どもを育てることに対する煩わしさや困難、不安感、子どもに対する態度に影響を及ぼすと考えられる。子育てに対して否定的な感情を持っていると、子どもに対する態度も拒否的、無関心など、子どもの発達に対してネガティブな影響を及ぼすものになると予測される。Simons and Johnson (1996)は、日常生活で経験されるストレス(Life Stress)は、親のパーソナリティや感情的な健康度(Emotional Well-being)を媒介として、養育態度の質に影響を及ぼすと指摘している。以上のような知見から、住環境から受けるストレスは、子育てに対する意識にも影響を及ぼしており、最終的に子どもに対する行動や態度に影響が及ぶという因果連鎖を想定することができるだろう。

これまで述べてきたように、住環境と子どもの発達との関係については、現在まで種々の調査・研究がなされているが、環境が母親を媒介として子どもの発達に及ぼす影響に注目して行われた研究はあまり見当たらないと思われる。織田(1990)や渡辺(1985b)の研究においては、この因果連鎖の可能性が指摘されてはいるが、先行研究はそのほとんどが各要因(住環境、母親の条件・状況、子どもの発達状態など)間の関係についてそれぞれ個別に注目して調査したものと考えられる。しかしながら、先行研究の結果などを検討すると、住環境、母親そして子どもの発達の因果関係について検討する意義は大きいと言えよう。そのためには、子どもの発達と深い関わりがあるような母親側の要因に対して、住環境が及ぼす具体的な影響について検討することが必要だと考えられる。よって、本研究

住環境に関する母親の評価が子育てに対する意識および養育態度に及ぼす影響

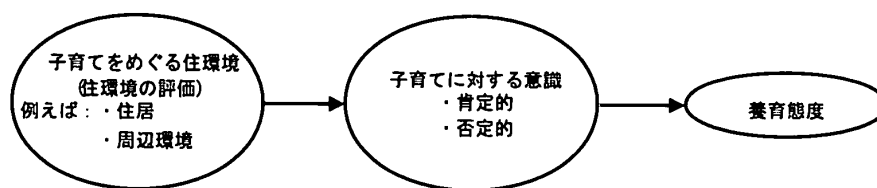


図1. 子育てをめぐる住環境、子育てに対する意識、養育態度間の関係のモデル図

は、住環境が母親を介して子どもの発達に及ぼす影響の解明という視点から、母親が持っている子育てに対する意識や養育態度に、住環境が及ぼす影響を実証的に明らかにしていこうとするものである。

2. 目 的

本研究は住環境の諸条件が母親に及ぼす影響について検討することを目的としている。具体的には、図1に示すように、住環境、子育てに対する意識、および養育態度の三要因間の関係について検討する。

3. 方 法

(1) 対 象

東京都（東京都西部の隣接する2特別区。人口はそれぞれ501,018人・641,930人）および千葉県（東京都近郊の人口433,545人の市）在住の母親を対象とした（人口統計は東洋経済新聞社（2000）による）。いずれの地域も都心までのアクセスが比較的良好、住宅地の多いベッドタウンと考えられる地域である。これらの地域に居住する母親1,881人に質問紙を配布、そのうち1,081名分を回収し（回収率：58.0%）し、本研究で使用する項目に欠損値がない841人を分析の対象とした。

(2) 調査手続き

2000年6月～8月の間、東京都内の児童館3館で実施されている親子を対象としたグループ活動（0～3歳児対象）に参加している母親に、当日の活動の最後に質問紙を配布し、次週の活動の際に回収した。また、低年齢の子どもと親のために開放している都内の施設に来場している母親に個別に質問紙を配布し、郵送回収を行った。さらに2000年10月にも千葉県内の保育園13園で質問紙を配布し、後日回収した。

(3) 調査内容

1) 住環境評価に関する項目：28項目

住環境から受けるストレスは、住環境において経験する不満や困難の程度によって測定することが可能であると考えられる（渡辺 1985 a）。そこで、本研究に

おいても、自身が住居や近隣環境において経験している困り事の評価によって、住環境から受けるストレスの指標とすることにした。

今回の調査で用いた住環境評価に関する28項目（主に住居内に関する項目15項目、近隣環境に関する項目13項目：Appendix 1 参照）は、松本（1997）が行った育児環境に関する調査において、育児中の母親から得られた住環境の不満な点・困っている点に対する自由記述回答を分類・整理したものをもとに設定した項目である。これらの項目に対して、1：まったくあてはまらない～5：非常にあてはまるの5段階評定で回答を求めた。

2) 子育てに対する意識：10項目

牧野（1982）による育児不安尺度項目などを参考に計10項目を設定した。具体的な項目は、「育児のために自分の好きなことができない」「自分一人で子どもを育てていると圧迫感を感じる」などの10項目である。これらの項目に対して、1：まったくあてはまらない～4：あてはまるの4段階の評価で回答を求めた。

3) 母親の養育態度：15項目

養育態度の測定方法として、本研究では、信頼性・妥当性の検討、精神医学的研究も数多く行われ、現在では世界的に広く使われている親子関係指標である（竹内 1999）、Parental Bonding Instrument (PBI) (Parker 1979)を自分の子どもに対する態度を測るように変えたもの（菅原等 1999）を用いた。これら全15項目に対して、1. まったくあてはまらない～4. あてはまるの4段階での回答を求めた。Parker *et al.* (1979) は、養育態度として暖かい養育態度を表している“Care”と子どもに対する干渉を表している“Protection”の2因子を設定しているが、先行研究から、前者の“Care”は安定した構造を持つが、後者の“Protection”は、当初想定されていた1因子構造ではなく、2因子に分かれてしまう場合もあり、構造が不安定であることが指摘されている（成田等 1998）。そこで本研究では、安定した結果の得られている因子「暖かい養育態度（“Care”）」に属する8項目（「暖か

表 1. 住環境評価に関する項目の因子分析結果

質問項目	平均値 (SD)	因子			
		I	II	III	IV
I スペース ($\alpha=0.75$)	14.06 (4.52)				
家が狭いので友人を呼ぶことができない		<u>0.75</u>	0.01	0.14	0.17
子どものためのスペースは十分ある (逆)		<u>0.68</u>	0.08	0.08	-0.03
自分のための場所がない		<u>0.60</u>	0.11	0.12	0.15
収納スペースは十分である (逆)		<u>0.58</u>	0.10	0.04	0.00
ベビーカー・三輪車の置き場所がない		<u>0.42</u>	0.14	0.07	0.13
II 近隣環境 ($\alpha=0.69$)	11.62 (3.39)				
この地域は静かである (逆)		0.09	<u>0.83</u>	0.01	-0.04
この地域の空気は悪い		0.08	<u>0.56</u>	0.03	0.08
車や電車が通るとうるさい		0.07	<u>0.53</u>	0.00	0.12
緑や自然に囲まれている (逆)		0.10	<u>0.50</u>	0.04	-0.08
III 室内環境 ($\alpha=0.75$)	4.09 (1.94)				
日当たりが悪い		0.13	0.04	<u>0.88</u>	0.02
風通しが悪い		0.19	0.04	<u>0.64</u>	0.08
IV 住居のつくり ($\alpha=0.62$)	5.43 (2.10)				
室内に段差が多い		0.13	0.00	0.06	<u>0.62</u>
子どもに目が届かない場所があり不安だ		-0.03	0.04	0.14	<u>0.62</u>
階段 (室内・室外を含む) の昇降がづらい		0.18	0.03	-0.09	<u>0.53</u>
因子負荷量 2 乗和		2.04	1.59	1.27	1.16
寄与率 (%)		14.57	11.34	9.04	8.30
累積寄与率 (%)		14.57	25.90	34.95	43.24

N=841.

く優しい声で話しかけている」「ほめてあげていない (逆転項目)」などを分析に使用した。

4) フェイス項目

母親の年齢、住居の広さ、家族構成、集合住宅・一戸建て住宅の別などについても回答を求めた。

4. 結 果

(1) 回答者の属性

本研究の回答者平均年齢は 33.3 歳 ($SD=4.78$) であった。平均住居面積は、 71.0 m^2 ($SD=38.39$) であった。全体の 47.2% が持ち家に住んでいた。さらに、集合住宅と一戸建て住宅の割合は、集合住宅 64.2%、一戸建て住宅 35.8% であった。また、家族の人数の平均が 3.79 人 ($SD=1.04$)、子どもの数が 1.64 人 ($SD=0.75$)、であった。

(2) 各指標の因子分析結果と尺度の検討

住環境評価に関する項目：住環境評価に関する 28 項目を主因子法 (Varimax 回転) で因子分析を行い、固有値 1.0 以上で抽出された主因子について、共通性が極端に低い項目や因子負荷量が 0.40 未満の項目を

除外しながら繰り返し因子分析を行った。その結果、最終的に 4 因子が抽出され、この 4 因子で全体の分散の 43% を説明していた。因子分析の結果を表 1 に示す。第 1 因子はスペースに関連した困り事を表している項目の負荷が高いことから“スペース”因子 (5 項目) と解釈した。第 2 因子は近隣環境の質に関連した項目が高く負荷していることから、“近隣環境”因子 (4 項目) とした。第 3 因子は日当たりと風通しの項目に高く負荷していることから、“室内環境”因子 (2 項目) とし、第 4 因子は住居のつくりから派生する困り事に関する項目から構成されていることから、“住居のつくり”因子 (3 項目) とした。各因子の α 係数は 0.62~0.75 の範囲であった。以下の分析では、困っている度合いが強い (住環境から受けるストレスが高い) ほど高得点になるように各項目の素点を換算し、各因子グループ毎に構成項目の素点を単純加算した合成得点を用いた。

子育てに対する意識：子育てに対する意識 10 項目を、主因子法 (Varimax 回転) で因子分析を行ったところ、固有値 1.0 以上で 2 因子が抽出された。共通性

住環境に関する母親の評価が子育てに対する意識および養育態度に及ぼす影響

表 2. 子育てに対する意識に関する項目の因子分析結果

質問項目	平均値 (SD)	I	II
I 子育てによる活動制限感 ($\alpha=0.79$)	15.68 (3.95)		
自分一人で子どもを育てていると圧迫感を感じる		<u>0.65</u>	0.11
子どもの相手ばかりで、大人との会話がしたいと思う		<u>0.61</u>	0.07
子どものことが煩わしくていららしてしまう		<u>0.61</u>	0.39
毎日毎日、同じことの繰り返ししかしていないと思う		<u>0.58</u>	0.17
育児を面倒くさく思う		<u>0.54</u>	0.39
育児のために自分の好きなことができない		<u>0.52</u>	0.11
自分は社会から取り残されているような気がする		<u>0.50</u>	0.06
II 育児肯定感 ($\alpha=0.65$)			
育児は楽しい	3.41 (1.21)	0.18	<u>0.82</u>
育児をすることによって自分も成長していると思う		0.07	<u>0.55</u>
因子負荷量 2 乗和		2.35	1.33
寄与率 (%)		26.05	14.77
累積寄与率 (%)		26.05	40.82

N=841.

表 3. 暖かい養育態度項目の主成分分析結果

質問項目	平均値 (SD)	主成分 I
暖かい養育態度 ($\alpha=0.86$)	26.13 (3.65)	
○○ちゃんに優しく接している		0.82
○○ちゃんによく微笑みかけている		0.82
○○ちゃんに色々なことを話しかけるのを喜んでいる		0.75
○○ちゃんに対して暖かく優しい声で話しかけている		0.72
○○ちゃんの気持ちを理解している		0.71
○○ちゃんに対して冷たい (逆)		0.64
○○ちゃんをほめてあげていない (逆)		0.59
○○ちゃんが必要なことや望んでいることに理解を示していない (逆)		0.57
因子負荷量 2 乗和		4.02
寄与率 (%)		50.29

N=841.

が極端に低い 1 項目を除き、再び因子分析を行った結果、2 因子が抽出された。この 2 因子で、全体の分散の 41% を表していた。因子分析の結果を表 2 に示す。第 1 因子は育児によって自身の活動が制限されることに関連した項目に負荷が高いため、“子育てによる活動制限感” (7 項目) と解釈した (以下、“活動制限感” とする)。これは子育てに対する否定的な感情であり、子育てに対するストレスの一側面であると考えられる。第 2 因子は育児を肯定的に捉えている項目に負荷が高いため、“育児肯定感” (2 項目) とした。各因子の α 係数はそれぞれ 0.79 と 0.65 であった。

暖かい養育態度：暖かい養育態度を表す 8 項目に対する回答を用いて、主成分分析を行ったところ、固有値 1.0 以上で 1 成分に集約した。これら 8 項目で全分散の 50% を説明していた。内的整合性を表す α 係数は 0.86 であった。暖かい養育態度を示すほど、高得点になるように各項目の素点を換算し、8 項目の得点を単純加算した合成得点を、養育態度を測定する尺度とした。主成分分析の結果を表 3 に示す。

(3) 尺度間の相関

7 尺度間の相関係数を表 4 に示す。住環境評価に関する 4 種類の変数間の関係については、“スペース”

表 4. 各尺度間の相関係数

	スペース	室内環境	住居の づくり	近隣環境	活動制限感	育児肯定感	暖かい 養育態度
スペース	—						
室内環境	0.27**	—					
住居のづくり	0.22**	0.10**	—				
近隣環境	0.21**	0.08*	0.06	—			
活動制限感	0.19**	0.11**	0.18**	0.06	—		
育児肯定感	-0.06	-0.04	0.04	0.01	-0.34**	—	
暖かい養育態度	-0.08*	-0.05	0.00	-0.01	-0.34**	0.48**	—

$N=841$. * $p<0.05$, ** $p<0.01$.

表 5. 重回帰分析の結果

	目的変数	
	活動制限感	暖かい養育態度
説明変数		
スペース	0.14**	-0.03
室内環境	0.06	-0.01
住居のづくり	0.15**	0.07*
近隣環境	0.01	0.02
活動制限感	—	-0.35**
暖かい養育態度	—	—
決定係数 (R^2)	0.06**	0.12**

$N=841$. * $p<0.05$, ** $p<0.01$.

が他の3変数との間に有意な正の相関を示しており($p<0.01$), 住居内のスペースに関する困り事を経験している人は, 住環境のその他の側面についても困っていることがわかった。住環境評価とその他の変数との相関については, 活動制限感に対して, “スペース”, “室内環境”, “住居のづくり”の3変数が有意な正の相関関係を示しており, 住宅に対して不満を感じている人ほど, 自身の活動が子育てによって制限されていると感じていることがわかった。育児肯定感については, 住環境評価に関する4変数のいずれとも相関関係は見られず, 育児肯定感は母親が持つ住環境に対する評価とは関連がないことが示された。暖かい養育態度と相関関係にあった住環境評価に関する変数は, “スペース”だけであった。このことから, 住居内のスペースに関する不満感は, 暖かい養育態度に関連していることがわかった。また, 活動制限感と暖かい養育態度の間には, 有意な負の相関関係が認められた。

(4) パス解析

相関分析の結果から, 「住環境から受けるストレス」は, 子育てに対する意識, 特に子育てによる活動制限感に影響を与え, さらにこの活動制限感が暖かい養育

態度に影響を及ぼす」という因果連鎖の想定が可能であると考へ, 重回帰分析を用いてパス係数を検討した。

子育てによる“活動制限感”は住環境評価に関する4つの変数を説明変数として, さらに暖かい養育態度は, 住環境評価の4つの変数, “活動制限感”の計5変数を説明変数として重回帰分析を行った(表5)。その結果を示したものが, 図2のパスダイアグラムである。

“スペース”と“住居のづくり”は, 活動制限感に対して, 正の有意なパスを示しており, 住居のこれらの側面からのストレスを強く感じているほど, 活動制限感が多く引き起こされる。さらに, 暖かい養育態度に対しては, 主に“活動制限感”から負の有意なパスが見られ, 子育てによって活動を制限されていると感じているほど, 暖かい養育態度で子どもに接することができにくくなっていることが示された。

5. 考 察

パス解析の結果, 住環境評価に関する変数, 子育てによる活動制限感, 暖かい養育態度との間に, 想定したパスが存在することが明らかとなった。

第一に, 母親が感じている住環境の状態と子育てによる活動制限感について関連性が認められたことから, 活動制限感には住環境の諸条件によって, 部分的に影響を受けていることが明らかとなった。住環境評価に関する各変数のうち, 活動制限感に対する説明力が大きかったのは, “スペース”と“住居のづくり”であった。これは「物理的空間が創り出す心理的空間, 行動的空間による心理的圧迫感, 行動的制約」(渡辺 1985 a)によるものと解釈できる。さらに, “スペース”に「自分(母親)のためのスペース」「家が狭いので友人を呼べない」という項目が含まれていることから, 母親は自分自身のための空間を必要としており, それが確保できないことからくる心理的圧迫感が子育てに対

住環境に関する母親の評価が子育てに対する意識および養育態度に及ぼす影響

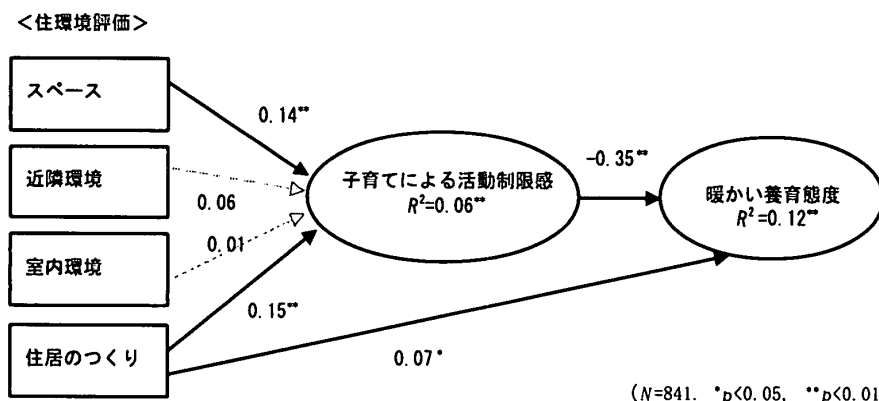


図2. 住環境評価，子育てによる活動制限感，暖かい養育態度間のパスダイアグラム

するストレス感，つまり活動制限感に影響を及ぼす可能性があることが示唆される。この結果は，「プライベート空間の確保は育児ストレス感を軽減する」としている泊等（1999）や「なわばり空間」を持っている主婦は持っていない主婦に比べて情緒的に安定し，不安感も低いとしている Omata（1995）の結果を支持するものと考えられる。さらに収納に関する問題については，東京在住の子どものいる家庭の約6割が不満を感じており（東京都住宅局総務部住宅政策室1998b），部屋を動き回る時に収納しきれなかったものにぶつかる，ものを移動させないと別の作業ができないといったことが，母親自身の活動を一時的にでも制限・妨害するために，ストレスの原因となっていることが推察される。以上のことから，用途の決まっている空間（収納や自分のための場所など）が広いことが母親が子育てに対して持っている否定的な感情に対して緩衝効果を持っていることが期待される。

第二に，“活動制限感”から“暖かい養育態度”への有意なパスがみられたことから，住環境についての困り事が増えれば“活動制限感”が強くなり，結果的に“暖かい養育態度”で子どもに接することができなくなってしまうという間接的影響が生ずることが示された。すなわち，先行研究の結果から推測されるように，住環境の諸側面の影響はまず，母親の子育てに対する否定的な感情（子育てに対するストレス）に対して影響を及ぼし，それを通じて，養育態度を変容させているものと考えられるだろう。

以上の結果をまとめると，「母親自身が住居内でいかに快適に日常生活を送るか」という側面に関わる住環境要因が，子育てに対するストレス（本研究においては“活動制限感”）を介して暖かい養育態度に影響を及ぼしていることがわかる。「育てる側」が環境か

ら受ける心理的な負荷を低減することにより，子育てに対するストレスの一側面への緩衝効果が期待され，暖かい親子関係を築くことができるものと考えられる。

6. 要 約

本研究では，住環境と子どもの発達に関連性を検討する第一段階として，住環境と「育てる側」である母親との関連性について分析を行った。その結果，住環境に関する母親の評価が，母親の活動制限感に影響を及ぼすことによって，母親の子どもに対する態度を変化させていることが示された。養育態度に影響を及ぼしているとされる様々な要因では説明できない残差の一部がこの住環境要因で説明可能と解釈できると推察されたことから，今回の調査の結果は意義のあるものと言えるだろう。

子育てのための住環境問題が深刻化している現在，不適切な養育態度や育児ストレスの原因となる他の要因の改善と同様に，今回の分析結果から得られた住環境要因，特に住居内スペースの質の向上，すなわち，「自分のためのスペース」の確保や使い易い間取りの工夫などの環境要因を特定・改善していくことは，有効であると考えられる。

引 用 文 献

- 秋山晴子（1998）住まいと人のかかわり，『住環境とヒト』（佐藤方彦，関 邦博編），井上書院，東京，62-78
 早川和男（1994）『住まいの処方箋』，情報センター出版局，東京，115-138
 早川和男，岡本祥浩（1993）『居住福祉の論理』，東京大学出版会，東京，141-155
 河野祐子，日暮 眞，織田正昭（1996）高層集合住宅居住の母親がもつ自覚的健康度に関する研究，小児保健研究，55（4），537-543
 厚生省（1998）『平成10年度厚生白書』，厚生省，東京，39

- 牧野カツコ (1982) 乳幼児をもつ母親の生活とく育児不安, 家庭教育研究所紀要, No. 3, 34-56
- 牧野カツコ (1988) く育児不安の概念とその影響要因についての再検討, 家庭教育研究所紀要, No. 10, 23-31
- 松本聡子 (1997) 都市に居住する母親の育児環境に対する評価, 早稲田大学 1997 年度修士論文
- 成田智拓, 佐藤哲哉, 平野茂樹, 西岡和郎, 坂戸 薫, 上原 徹, 伊藤哲彦, 笠原 嘉 (1998) Parental Bonding Instrument (PBI) によって測定された両親の養育行動の因子構造, 季刊精神科診断学, **9** (2), 263-277
- 織田正昭 (1990) 高層住宅居住の母子の行動特性とその影響, 保健婦雑誌, **46** (9), 754-760
- 織田正昭, 日暮 眞 (1991) 高層住宅と子供, 公衆衛生, **55** (5), 312-316
- Oda, M., Taniguchi, K., Wen, M., and Higurashi, M. (1989) Effects of High-rise Living on Physical and Mental Development of Children, *J. Human Ergol.*, **18**, 231-235
- Omata, K. (1995) Territoriality in the House and Its Relationship to the Use of Rooms and the Psychological Well-Being of Japanese Married Women, *J. Environ. Psychol.*, **15**, 147-154
- 逢坂文夫 (1991) 最近の居住環境と健康影響との関係について, 住サイエンス, '91 秋号, 33-47
- Parke, R. D. (1978) Children's Home Environments: Social and Cognitive Effects, in *Children and Environment* (ed. by Altman, I., and Wohlwill, J. F.), Plenum Press, New York, 33-81
- Parker, G. (1979) Parental Characteristics in Relation to Depressive Disorders, *Br. J. Psychiatr.*, **134**, 138-147
- Parker, G., Tupling H., and Brown, L. B. (1979) A Parental Bonding Instrument, *Br. J. Med. Psychol.*, **52**, 1-10
- 定行まり子 (1986) 高層住宅における住環境特性と幼児の自立行動に関する研究—幼児の生活空間計画に関する基礎的研究—, 東京工業大学昭和 62 年度博士論文
- 坂間伊都美, 山崎喜比古, 川田智恵子 (1999) 育児ストレスの既定要因に関する研究, 日公衛誌, **46** (4), 250-261
- Simons, R. L., and Johnson, C. (1996) The Impact of Marital and Social Network Support on Quality of Parenting, in *Handbook of Social Support and the Family* (ed. by Pierce, G. R., Sarason, R., and Sarason, I. G.), Plenum Press, New York
- 袖井孝子 (1994) 『住まいが決める日本の家族』, TOTO 出版, 東京, 65-104
- 菅原ますみ, 北村俊則, 戸田まり, 島 悟, 佐藤達哉, 向井隆代 (1999) 子どもの問題行動の発達: Externalizing な問題傾向に関する生後 11 年間の縦断研究から, 発達心理学研究, **10** (1), 32-45
- 竹内美香 (1999) PBI の発生と養育態度尺度の歴史, 季刊精神科診断学, **10** (4), 375-398
- 戸田須恵子 (2000) 母親の育児ストレスと幼児の気質および養育態度との関係について, 北海道教育大紀要 教育科学編, **50** (2), 35-45
- 東京都住宅局総務部住宅政策室 (1998 a) 『若い世代の東京の居住に関する意識調査』, 東京都, 11
- 東京都住宅局総務部住宅政策室 (1998 b) 『東京都住宅白書』, 東京都, 35
- 泊 真児, 吉田富二雄, 菅原健介, 片山美由紀, 高江幸恵, 広瀬彩子 (1999) プライベート空間の確保が育児ストレス感の緩和に及ぼす効果—育児ストレスとプライベート空間の機能(2)—, 日本心理学会第 63 回大会発表論文集, 710
- 東洋経済新聞社 (2000) 『都市データバック』, 東洋経済新聞社, 東京
- 渡辺圭子 (1982) 『住環境と精神健康に関する研究 建築研究報告 No.101』, (社) 建築研究振興協会, 東京, 23-38
- 渡辺圭子 (1985 a) 住環境と精神健康, 『講座生活ストレスを考える 2 生活環境とストレス』(山本和郎編), 垣内出版(株), 東京, 77-102
- 渡辺圭子 (1985 b) 集合住宅と主婦の精神保健, 公衆衛生, **49** (12), 805-813

Appendix 1. 住環境評価に関する項目 (全 28 項目)

住居について (15 項目)

1. 風通しが悪い
2. 日当たりが悪い
3. 建物の老朽化が気になる
4. 新建材によるにおいなどが気になる
5. 階段 (室内・室外を含む) の昇降がづらい
6. 室内に段差が多い
7. 子どもに目が届かない場所があり不安だ
8. 間取りの使い勝手が悪い
9. 子どものためのスペースは十分にある
10. 隣近所への音漏れを気にしている
11. 収納スペースは十分である
12. ベビーカー・三輪車の置き場所がない
13. ベランダの柵・出窓などの高さが気になる
14. 自分のための場所がない
15. 家が狭いので友人を呼ぶことができない

周辺環境について (13 項目)

16. 交通面での安全性が心配である
17. 周辺の歩道の整備が行き届いている
18. この地域の空気は悪い
19. 隣近所付き合いはうまくいっている
20. 教育上良くないと思われる施設がある
21. 街灯が整備されていない
22. 緑や自然に囲まれている
23. 治安が悪い
24. 物価が高い
25. この地域は静かである
26. 車や電車が通るとうるさい
27. 悪臭がする
28. 子育てのサポート体制が整っている